

最も困難な授業

当たり前のことを書きます。

ろう学校は、聴覚に困難さがある児童生徒が学ぶ学校です。

中学部1年理科で「音」の学習をしていた。

どのような指導、学びを行うのか興味があった。

補聴器を用いてほぼ聞き取ることのできる程度の生徒

人工内耳を用いて聞き取ることのできる程度の生徒

手話を用いてコミュニケーションをする生徒

少人数であれ、生徒は聞こえの程度はさまざまであり、一人一人への配慮が必要です。

理科の学習を意欲的に取り組む生徒たちなので、先生は、楽器（三味線）を使わせて高い音や大きな音を出すためのさまざまなことを試させていた。中学生が学ぶときのよくある授業の進め方です。

ところが、授業中にこんなことが起こった。

楽器操作前までは、全員が授業に参加していたが、実際に楽器を用いて大きな音や高い音を出す実験になると、ある生徒は全く参加しなくなってしまった。

先生は何とか実験させようと試みたが、その生徒は自分の席に座ったままであった。

授業はそのまま進んだ。

授業の後半で、音の大小高低と波形の関係について学ぶにあたり、オシロスコープを用いたときである。その生徒は、突然オシロスコープを用いる実験に参加し、大小高低さまざまな自声を出し、波形の変化を見ているのである。それも楽しそうに。

その生徒は、聞くことの困難さが他の生徒に比べて大きかったようだ。従って、知識は持っているのだが、実際に楽器から音を出し、聞き比べることをしなかったのだろう。

だからこそ音を視覚化するオシロスコープの存在は大きかった。

通常、波形を見ることだけでも中学生は興味を持つのだが、視覚に困難さがある生徒にとっては、一層理解を助けるはたらきがあるのだろう。

授業内容は中学生である以上変わらないが、学ぶ生徒によってどのような指導法を用いるかはちがいがあってもよい。今回登場した生徒たちには、はじめからオシロスコープや音楽のト音記号など視覚化した内容から入っていてもよいのである。

最適な指導法を選択することができるのは、生徒を最も理解している先生である。

今日的な課題である、すべての先生のカリキュラム編成やカリキュラムマネジメントへの取組を求めていることは、ここにも関わってくるのであろう。

自分自身大変学んだ授業であった。